

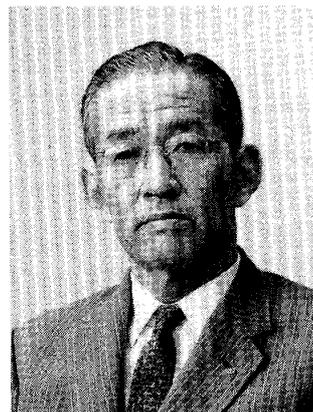
先見の明で日本をリードした北川一栄さん

小笠原 暁

OR 学会昭和 51・52 年度の会長であった北川一栄さんが亡くなられてからすでに 30 年の歳月が流れた。私は昭和 30 年代の中頃から関西生産性本部や大阪工業会、関西情報センター等の会議で北川さんの警咳に接する機会に恵まれ、北川さんを団長とする海外視察団にコーディネータとして数回お供をしたことがある。当時は私もまだ 30 歳代で、若さに任せてズバズバものを言うところが気に入られたのか北川さんには随分可愛がっていただいた。この稿を書くにあたって私の記憶を蘇らせるためにも、また私の知らない北川さんの側面を知るためにも、北川さんが長く勤務されていた住友電工に御願ひして旧知の元社長・会長、現在名誉顧問の川上哲郎さんにお会いしてお話を伺うことができた。以下の叙述は川上さんのお話に負うところが多い。川上さんとともに北川さんに関する会社経歴資料を与えて下さった住友電工人事総務部に対しここに深甚なる謝意を表する次第である。

北川さんは大正 13 年第三高等学校理科甲類を卒業され、続いて東京帝国大学工学部電気工学科へ進学、昭和 2 年御卒業と同時に嘱望されて住友電工に入社された。入社後ヨーロッパやアメリカに留学され、ますます研鑽を積み、研究者・発明家としての素質に磨きがかかったものと思われる。その結果として昭和 17 年電気学会から「力率改善用ならびに進相用静電蓄電器の設計ならびに製作」に対し電気学術振興賞・進歩賞、昭和 19 年東京帝国大学から「油入紙絶縁蓄電器の設計及び製作に関する基礎的研究」に対し工学博士の学位、昭和 30 年発明協会から「OF 式電力用蓄電器ならびに同蓄電器装置および付属機器」に対し特賞ならびに大阪通商産業局長賞、翌年内閣総理大臣から OF 式コンデンサーの発明に対し紫綬褒章がそれぞれ授与された。さらに昭和 45 年アメリカ電気・電子技術者協会から名誉会員に推挙され、昭和 49 年電気学会から功績賞が授与されるなど北川さんの受けられた表彰・感謝状等は枚挙にいとまがない。先に挙げた紫綬褒章の他に昭和 38 年には藍綬褒章、昭和 49 年

には勲一等瑞宝章を受章しておられることを特記しておきたい。上に掲げた OF 式コンデンサーは戦前に北川さんが発明されたものであり現在もなお使用されているものであるが、当時は特許の取り方が分からず、特許を電気パワーに限定して申請してしまった。戦後エ



レクトロニクスの発達とともにコンデンサーの需要が急増し、松下電器や村田製作所が漁夫の利を占めたようであるが、北川さんは「コンデンサーで特許を取っておかなかったのは失敗だった」としばしば述懐されていたそうである。

北川さんはコンピュータについても早くから関心を寄せられ、昭和 30 年代の初めからコンピュータの科学・技術および経営に対する意義を説いておられた。当時はいまだ関心を持つ人々が少なく、通商産業省においてさえ重工業全盛時代であったためかコンピュータ担当課は役所の片隅の狭い一室に置かれている有様であった。住友電工においてもコンピュータの知識を持つ社員は少なく、特に文科系大学卒業の幹部社員には北川さんの思いが理解されず、イライラしておられたそうである。さらに北川さんはいまだ誰も考えてもいない頃からコンピュータと通信のコラボレーションについて思索を巡らしておられ、昭和 42 年通商産業省産業構造審議会情報産業部会部会長に御就任されてからの答申「情報化社会に向かって」の中に北川さんの考えが盛り込まれた。この答申書に欣喜雀躍したのが当時日本のコンピュータリゼーションの推進役であった通産省の平松守彦さん（後の大分県知事）である。逆に通信は我が所管であると思っていた郵政省は通産省審議会の部会が通信回線の開放を主張したことに対して不快の念を隠さなかった。

北川さんはまた「科学的経営管理」というスローガンを掲げ、若い社員にフォードの生産性向上方式を勉強させるとともに、OR, IE, QCなどを我が国の企業で最初に導入して学会との交流にも努められた。われわれのOR学会については冒頭に書いたように昭和51・52年度の会長を引き受けて下さり、創立20周年記念事業を中心として事務局の改革や関西支部の活性化に尽力された。関西におけるOR, IE, QC, SE, コンピュータの普及・教育・研究の拠点であった関西生産性本部、大阪工業会、関西経営情報科学協会、関西情報センター、大阪科学技術センター等々の設立にも指導的な役割を果たされ、理事長、会長などの要職に就かれている。特に昭和45年に創立された関西情報センターは同じ年の大阪万国博覧会で使用されたコンピュータを引き取って関西におけるコンピュータリゼーションをより一層進めたいという北川さんの発想に基づくものであった。

昭和40年代の半ば頃から北川さんが情熱を傾けられたのが「砂栽培」であり、私も何度かお話を伺った。「砂栽培」とは砂の持つ透水性・通気性を生かして養液をパイプにより供給・点滴し野菜や果物、花卉を栽培する技術である。北川さんは当時誰も考えていなかった「農業の工業化」を目指して熱心に取り組み、九州の実験プラントへ通っておられた。日本の農業の現状を見ると、現在では経済的にペイするものであるとは言い難いとしても、将来必ずや北川さんの慧眼が讃えられる日が来るものと信じて疑わない。

上述したように北川さんは先見の明とユニークな発想をもって、科学技術においても社会においても、そして会社の経営においても常に人に先んじて将来を見通しておられた。昭和31年に社長になられたが、社長は8年間だけと思っておられたのか昭和39年には辞めると言われていたようである。しかしその頃我が国を襲った不況のため多くの企業が人員削減を余儀なくされたにもかかわらず、北川さんは任期を2年延ばされて事業を創出し、住友電工における人員削減を回避された後に社長を辞められ、昭和41年に会長に就任された。

北川さんは幼少の頃から虚弱体質であったので、時間を上手く使うことを考えておられたらしい。「学校で習ったことはその日のうちに理解しておけ。試験勉強は最も愚劣だ」というのが北川さんの勉強に関する座右の銘であった。もう一つ社員によく言われた言葉は「無意識で処理するな、意識的に行動しろ」ということである。そして行動・思考はすべて先手、先手であった。北川さんを迎えに運転手が約束の時間の10分前に行ったところ、すでに待っておられた。それではということで20分前に行ったがやはり待っておられたそうである。海外視察団でお供をしたときにもこのようなことはしばしばあった。私もかなりセッカチなほうであるが、この人は私よりセッカチだと思ったことである。海外視察団では訪問先で無意味な外れや重複した質問をする団員が大抵1人か2人はいる。北川さんもちょっとイラだっておられた御様子とお見受けしたので、その日の晩ホテルの部屋をお訪ねして2人でお酒を飲みながら四方山話の末、私が「頭が悪いってことは罪悪ですね」と申し上げると北川さんは「君、それは思うことはいいけれど、人に言っただけじゃないよ」と諭して下さった。

これまでの私の記述を読まれると、北川さんは真面目一辺倒の方だと思われるかもしれないが、決してそうではない。お酒が入ると歌舞音曲の類は駄目であったが若い人たちが聞いて笑い転げるような柔らかい話をして下さった。

北川さんは研究者として、発明家として、経営者として、そして何よりも人間として一流中の一流の人であったと思う。この稿を書きながら私の臉には在りし日の北川さんの御姿がありありと甦ってくる。北川さんは特に戦後の日本にはなくてはならない人であったとの感が深い。そして完璧にその使命を果たされてあの世に旅立たれたのだと思う。私には北川さんがあのちょっと掠れ気味の御声で「今の日本はどうなっているんだね。誰も人はおらんのかね」と仰っているような気がしてならない。北川さんを思慕することしきりである。